

古殿町全域

1 想定するモデルとしての姿、モデルとする事項

- 作付面積を12haまで拡大するとともに、水稻との複合経営による収益増を目指す。
- 湿害対策の実施の定着を図り、収量を安定させる。
- 新たな畑作物の導入による輪作体系の確立。



2 生産概要（中心的な担い手の概要）

- 【作付面積】大豆：3.6ha（R3）
- H29に古殿町が事務局となり「古殿町大豆振興会」を設立
- 町が大豆栽培・買い上げ支援したことを契機に、大豆の作付面積を拡大。（R3：3.6ha → R6：12.7ha → R7：6.3ha）



3 取組のポイント（モデルとして構築する取組）

<ドローンによる病害虫防除の実施>

- R5～R6は高温の影響で害虫の発生量が多く、虫害により収量・品質が低下したことから、R7はドローンによる2回防除を行った。

<需要に応じた生産を徹底>

- 「タチナガハ」と「里のほほえみ」の栽培比較を行う（R6-R7）。
- 生産した大豆は町が全量買い上げし、大豆ミートやきなこに加工。大豆加工品は道の駅での販売や町内の学校給食で提供。



4 取組成果

<病害虫防除の徹底による収量品質の向上>

- 開花期以降の病害虫防除をドローンによる集団防除とし、また、回数を2回（古殿町慣行：1回）に増やした結果、収量・品質が改善。

<面積の拡大>

- 町、JAと連携し、新規生産者の掘り起こしと栽培支援を行った結果、面積は増加。R6には12.7haまで拡大。（R3：3.6ha → R6：12.7ha → R7：6.3ha）
※R7は米価高騰により面積減少

<栽培比較による品種の決定>

- 2年（R6-R7）の栽培比較や加工適性の評価から、「タチナガハ」に決定。

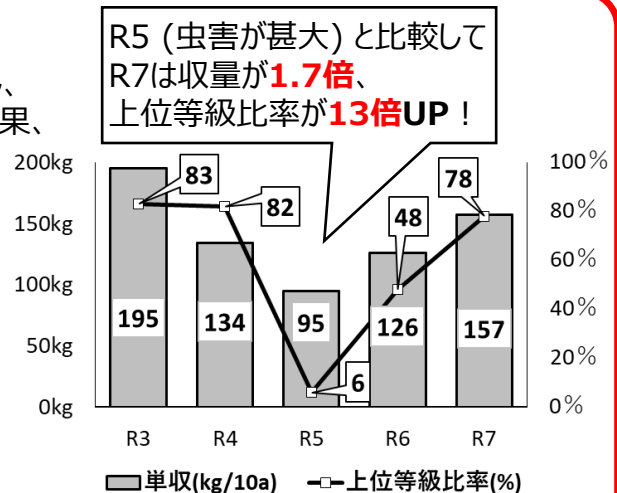


図 収量・品質の推移

5 残された課題

- 高温対策として、基本技術（排水対策や中耕・培土）の徹底や土づくりを進める。また、畦間灌水が可能なほ場については実施する。
- そばとの輪作体系も試験的に始まっており、地域全体への波及を目指す。